

しの土を取りて之を爪上に置き迦葉に告げて言わく、是の土多きや、十方世界の地の土多きや。迦葉菩薩、仏に白して言さく、世尊、爪上の土は十方の所有の土に比べざるなり。善男子、人有りて、身を捨てて還りて人身を得、三惡の身を捨てて人身を受くることを得。諸根完く具して中国に生じ、正信を具足して能く道を修習し、道を修習し已りて能く正道を修し、正道を修し已りて能く解脱を得、解脱を得已りて能く涅槃に入るは、爪上の土の如く、人身を捨て已りて三惡の身を得、三惡の身を捨てて三惡の身を得、諸根具せずして辺地に生じ、邪倒の見を信じて邪道を修習し、解脱、常樂の涅槃を得ざるは、十方世界所有の地土の如しと經文上。此の文は多く法門を集めて一具と為せり。人身を捨てて還りて人身を受くるは爪上の土の如く、人身を捨てて三惡道に墮つるは十方の土の如し。三惡の身を捨てて人身を受くるは爪上の土の如く、三惡の身を捨てて還りて三惡の身を得るは十方の土の如し。人身を受くるは十方の土の如く、人身を受けて六根欠けざるは爪上の土の如し。人身を受けて六根欠けざれども辺地に生ずるは十方の土の如く、中国に生ずるは爪上の土の如し。中国に生ずるは十方の土の如く、仏法に値うは爪上の土の如し。又云く、「一闍提と作らず、善根を断ぜず、是の如き等の涅槃經典を信ずるは爪上の土の如く、乃至、一闍提と作り、諸の善根を断じ、是の經を信ぜざるは、十方世界所有の地土の如し」と經文上。此の文の如くんば、法華・涅槃を信ぜずして一闍提と作るは十方の土の如く、法華・涅槃を信ずるは爪上の土の如し。此の經文を見て弥感涙押え難し。

今日日本國の諸人を見聞するに、多分は權教を行ず。設い身口には実教を行ずと雖も、心には亦權教を存

す。故に天台大師摩訶止觀の五に云く、「其の痴鈍なる者は毒氣深く入りて本心を失うが故に、既に其れ
 信ぜざれば則ち手に入らず、乃至、大罪聚の人なり。乃至、設い世を厭う者も下劣の乘を翫び、枝葉に
 攀附し、狗作務に狎れ、獼猴を敬いて帝釈と為し、瓦礫を崇んで是れ明珠なりとす。此れ黒闇の人なり。
 豈道を論ずべけんや」と上。源空並に所化の衆、深く三毒の酒に酔いて大通結縁の本心を失い、法華・涅槃に於て不信の思を作し一闡提と作り、觀經等の下劣の乘に依りて方便の称名等の瓦礫を翫び、法然
 房の獼猴を敬いて智慧第一の帝釈と思ひ、法華・涅槃の如意珠を捨てて如来の聖教を偏するは権実二教を
 弁えざるが故なり。故に弘決の第一に云く、「此の円頓を聞きて宗重せざる者は、良に近代大乘を習う
 者の雜濫するに由るが故なり」と。大乘に於て権実二教を弁えざるを雜濫と云うなり。故に末代に於て
 法華經を信ずる者は爪上の土の如く、法華經を信ぜずして權教に墮落する者は十方の微塵の如し。故に
 妙樂歎きて云く、「像・末は情澆く信心寡薄にして、円頓の教法は蔵に溢れ函に盈つれども、暫くも思
 惟せず。便ち目を瞑ぐに至る。徒に生じ徒に死す。一に何ぞ痛しきや」と上。此の積は偏に妙樂大師權
 者爲るの間、遠く日本国の当代を鑑みて、記し置く所の未來記なり。問うて云く、法然上人の門弟の内
 にも一切經藏を安置し法華經を行ずる者有り。何ぞ皆謗法の者と称せんや。答えて曰く、一切經を開き
 見、法華經を読むは、難行道の由を称し選択集の惡義を扶けんが爲なり。經論を開くに付きて彌謗法
 を増すこと、例せば善星の十二部經・提婆達多の六万藏の如し。智者の由を称するは自身を重んじ惡法
 を扶けんが爲なり。